

要旨：「他者」と日本の「神国思想」

北京外国語大学 馬雲雷

神国とは、神が開き、守護している国。また、皇孫が君臨する神聖な国である。この定義には①神々の加護の下にある国と、②天照大神の神孫たる天皇の統治する国という意味の二面がある。①は広い意味での神国に対して、②は狭い意味での神国であると言ってもよからう。もし①に従えば、日本だけではなく、古代のエジプト、ローマ教皇を元首とするバチカン、ギリシア神話に出てくる多くの国々も「神国」と称することができよう。しかし、もし②を加えて限定すれば、神国の範囲は大幅に縮小し、まさに北畠親房が『神皇正統記』の冒頭で「大日本者神国也。天祖ハジメテ基ヲヒラキ、日神ナガク統ヲ伝給フ。我国ノミ此事アリ。異朝ニハ其タグヒナシ。此故ニ神国ト云也」と記述したように、ここでの神国は日本のみを指していることとなった。本文で論じる「神国」も日本のみを指している。

日本の神国思想がどのように生まれたのか、どのように発展してきたのか、将来どう変わっていくのか、など一連の問題については、日本の歴史、日本の原始信仰、中国の道教、神仏習合との関係など様々な面から論述されてきた。中国においても、日本においても、「日本の神国思想」に関する著作や論文も枚挙に暇がない。しかし、周知のように、国は従来あったものではなく、一定の地域内に住む人間集団が、生命の安全と生活の保障を求めて、また外敵の侵入を防ぐために形成した政治的共同体である。また、丸山真男は『日本政治思想史研究』で国民主義の形成を論述する時、外からの刺激が大きな役割を果たしたと指摘した。勿論、神国思想は丸山氏のいわゆる国民主義、または国の形成と本質的に異なっているが、その形成メカニズムは似ているところがあると思われる。田村円澄の話を借りれば、「神国思想の本質は政治思想である」。それに、『世界大百科事典』にも、神国思想が「政治的統一が進み、他国・他民族への意識が生まれてくると、日本を他国よりもすぐれた国とする主張の拠り所となった」と書いてあった。

簡単に言えば、外的要素としての「他者」は日本の神国思想とは大きく関わっていることは言うまでもない。しかし、これは決して神国思想の発展・変化する過程において、「他者」の役割が言わずして自明のことを意味しない。「他者」はいったいどんな役割を果たしていたのか、「他者」が「神国思想」に果たした役割から何が窺えるのか、といった問題は未だ明らかにされていないと思われる。それがゆえに、筆者は日本の神国思想の誕生と変容を個人的な意見を加えながら概観した上で、「他者」に焦点をあててその役割を整理し、「他者」の果たした役割から神国思想の行方をも考えてみた。